

詩風エッセイ集
もう一つの家族



皆岡 樹史

目次

もう一つの家族	
犬にはなりたくない	3
秋の青空	5
S氏の生涯	6
イルカウォッチング	8
カ、カ、カ、蚊	9
ご安全に	10
ネズミ通り十五番地	11
一羽の鳩	13
夏の一コマ	14
夏問答	15
河童	16
犬が見た戦争	18
坂を上る	19
真夜中のカラスたち	20
人の群れ	21
蝉、蝉、蝉	22
巣立ち	23
猫ストレス	24
床屋の犬	25
朝の公園	27
帝の軍隊	28
道ばた仁義	30
鳥	31
猫の島	32
鳩との格闘	33
妖怪	34
来世の自己表現	35
旅日記	36
独演会	37
ラッキー	38
輪廻（1）－水の人生－	39

輪廻（２）-ぽっどん人生-	40
もう一つの家族	41
奥付	
.....	45

もう一つの家族

犬にはなりたくない

保育園に通っている頃、
生まれて初めて犬の交尾を見た。
お尻とお尻がくっついて
いかにも困ったような顔をして
しきりに「ワンワン」と吠えていた。
そばにいた伯母に
「何をしているのか」と尋ねると、
クリスチャンの伯母は慌てる様子もなく
「悪いことをしたから、
神様に罰を与えられたんよ」と答えた。
その時ぼくは思ったものだ。
『犬にはなりたくない』と。

その行為が何であるかが、
ようやくわかった頃、
ぼくは生まれて何度目かの犬の交尾を見た。
相変わらず困ったような顔をして
「ワンワン」吠えている。
『何がワンワンだ、ふざけやがって』
そう思っている時だった。
近所のおっさんがバケツを持ってきて、
その犬めがけて水を浴びせかけた。
二匹は慌てて逃げていった。
その時ぼくは思ったものだ。
『犬にはなりたくない』と。

高校の頃だったか、
親戚の家に遊びに行った時に、
そこの飼い犬がしきりと
タオルケットに攻撃をしかけていた。
何をやっているのだろうと見ていると、
次第に犬はエスカレートしてきて、

ついには腰を振り出した。
それを見た伯父から、
犬は散々文句を言われ、
最後に頭を叩かれていた。
その時ぼくは思ったものだ。
『犬にはなりたくない』と。

秋の青空

黄色い階段に止まってる
真っ黒カラスが口を開け
ポケットと空を眺めてる
秋の青空眺めてる
悲しみ堪えて見てるのか
楽しい夢を映してるのか
ポケットと空を眺めてる
秋の青空眺めてる
ぼくがパシッと手を叩くと
ヤツは一瞬たじろぐが
そこから離れることはない
相も変わらず口を開け
ポケットと空を眺めてる
秋の青空眺めてる

S氏の生涯

いったいオレは何のために生まれてきたんだろう。
気がついた時には卵の中にいて、
そこから必死に這い出した。
初めて土に身をさらした時は痛かったけど、
それもじきに慣れていった。
食べ物には困らなかったな。
そこにあるもの何でも口の中に入れていったから、
腹の減る暇はなかったよ。
それでブクブクと肥えていったんだ。
土の生活は何年続いたんだろう？
そこには天敵もいたけれど、
今となってはいい思い出だ。

ついこの間のことだった。
なぜか太陽が見たくなかったんだ。
そう思うと息が苦しくなってきた。
そこで必死に地上に這い上がっていったんだ。
生まれて初めて見る太陽にまぶしさをおぼえ、
生まれて初めて見る樹木に心地よさを感じた。
生まれて初めての地上にとにかくオレは興奮した。
ところがそれからしばらくすると、
だんだん体が固まっていった。
そしてそのまま動けなくなった。

動けない時間はけっこう長かった。
オレは卵の中にいた時のことを思い出して、
その間ずっともがいていた。
それがよかったみたいで、
体に貼り付いていたものが剥がれて、
急に体が軽くなった。
そのとたんバシッという音とともに体が破れ、
光が差し込んできた。

やっとの思いで体から這い出すと、
なぜか腹回りがスースーする。
よく見ると足が生えているではないか。
おまけに背中がむずがゆい。
そこで体を揺すってみると、
あれあれ宙に浮いている。
いったい何が起こったんだろうと、
木に止まって考えた。
するとお尻が細かく震えだし、
わけのわからぬ音が出るんだ。

今度は音との闘いだ。
とにかく無意識に音が出るもんだから、
もうどうしようもない。
そしてその音が納まらぬままに、
今日という日を迎えた。
その音を聞いて女がやってきた。
そしてしきりにオレを誘惑する。
えっ、なんだこの気持ちは！？
オレは無性にその女が欲しくなった。
女が欲しい、女が欲しい、女が欲しい！！

…ことを終えてオレは今、
地面の上をのたうち回っている。
何度羽を動かしても飛べないんだ。
オレのそばを人や犬が歩いている。
もう死ぬのかなあ…？
いったいオレは何のために生まれてきたんだろう。

イルカウォッチング

「プハーッ、プハッ、プハーッ」
素潜りじじいの息継ぎのような
苦しさをはき出す音が聞こえてくる。
「来たよ」「来たー」「来ましたね」
イルカの群れが必死に船を追ってきた。
無傷イルカの背中もいろいろあって
そんな背中が、我が一番を繰り返す。
きっと彼らは仲間との勝負をしている。
ひいてはこの船との競争になっている。
勝負に飽きると今度はジャンプを始める。
自分の技を仲間や人間に誇示しだす。
一頭がジャンプすると、負けじともう一頭が
より高く宙を飛ぶ。より長く宙に舞う。
それも飽きると群れは去る。
『これで終わりかな』とっていると
別の群れが必死に船を追ってきた。
「プハーッ、プハッ、プハーッ」

カ、カ、カ、蚊

もし奴らに出会ったら
あわてず、さわがず
ゆっくり、じっくり
奴らの命を狙いましょう。

じっと息を殺して
何があっても物音を
立ててはなりません。

奴らは音に敏感ですから。

そこでちょっとした
倫理や宗教心を持ち出して
躊躇してもいけません。

やる手に力が入りませんから。

やる時は一気に叩きましょう。

もしそこで奴らを逃がしたら

今度はこちらがしつこく

攻められるのですから。

ご安全に

昼間、車を走らせている時だった。
太陽をキラリと反射させた飛行物体が
こちらをめがけて飛んできた。
ぼくは思わずブレーキを踏んだ。
よく見ると、その飛行物体は
今年初めて見るトンボだった。
いや、大雑把にトンボというより
ヤンマと言ったほうがわかりいい。
そこにいたのはシオカラなどの
普通サイズのトンボではなくて
オニヤンマやギンヤンマといった
まさに飛行物体と呼べるような
存在感のある大きなトンボだった。

さて、ブレーキを踏んで減速したものの
元々車はスピードを出してなかったので
トンボは車に激突せずに、うまく
車をよけていったものと思われる。
いくら昆虫とはいえ、車に当たれば
「コツツ」程度の音はするだろう。
だが、その音は聞こえなかった。

ところでそのトンボ、えらく
きつそうに飛んでいるように見えたけど
きつとこの暑さと湿気で
体の切れが悪かったのだろうか。
もしかしたら、汗が目に入ってしまう
車が見えなかったのかもしれないな。
お互い安全には気をつけましょう。

ネズミ通り十五番地

部屋の灯りが消える
おれたちの世界が始まる

小さな穴から抜け出して
大きな箱を横切って
台所の街に急ぐんだ

寝坊したらおしまいだ
もうご馳走は残ってない
今日一日は飯抜きだ

ここはおれたちの天国
誰にも邪魔されない
ネズミ通り十五番地

ところでメリーはおれの生きがい
みんなが彼女を狙っている
彼女の家は戸棚の向こう

犬の遠吠えが激しくなると
そろそろメリーのお出ました
みんな彼女のご機嫌を取る

ここはおれたちの天国
誰にも邪魔されない
ネズミ通り十五番地

本当は誰もメリーを愛してないんだ
ただ彼女をチュウっと抱きたいだけ
——でも、おれの愛は本物だ！

ここはおれたちの天国

誰にも邪魔されない
ネズミ通り十五番地

一羽の鳩

若い頃、ある観光地に行った時
しつこくたかってくる
一羽の鳩にキレてしまい
追い回したことがある。
当然鳩は逃げるわけだが
なぜか飛ぼうとしない。
人を馬鹿にしたように
走って逃げ回るのだ。

きっと鳩は人間を餌をくれる
便利な動物だと思い込み警戒心を
抱かなくなっているせいだろう。
生き物に優しくすればするほど
彼らの思い込みは強くなり
そのうち人を恐れなくなる。
実はこの思い込みが彼らにとって
一番危険なことなのだ。

しかし残念ながらそのことを
理解出来る知能を彼らは
持ち合わせてはいない。
その昔、ある僧はそのことを
棒で叩いて子鹿に教え込んだという。

夏の一コマ

トンボが飛行機を背負って飛んでいる。
飛行機はあまりに大きすぎて、
その存在はわからない。
だけどトンボは飛んでいる。
飛行機を背負って飛んでいる。

飛行機がトンボに背負われて飛んでいる。
トンボはあまりに小さすぎて、
その存在はわからない。
だけど飛行機は飛んでいる。
トンボに背負われて飛んでいる。

夏問答

「夏は森の仲間たちと
友だちになれる季節だね」
と笑い顔の軽い男は言った。
「森の仲間たちなんかと
友だちにはなりたくない」
と怒り顔の重い女は答えた。

「リスとかウサギとか野鳥とか
かわいいものだらけじゃないか」
と笑い顔の軽い男は言った。
「ヘビとかカラスとか時には
イノシシだって出てくるのよ」
と怒り顔の重い女は答えた。

「カブトムシとかクワガタとか
貴重な昆虫もいるんだよ」
と笑い顔の軽い男は言った。
「ムカデとか毛虫とか
毒のある虫だっているのよ」
と怒り顔の重い女は答えた。

「夏は自然の優しさと
ふれあえる楽しい季節だよ」
と笑い顔の軽い男は言った。
「夏は自然の厳しさと
真剣に向き合う季節なのよ」
と怒り顔の重い女は答えた。

河童

前の会社にいた頃、昼食後いつもぼくは自分の車の中で寝ていたのだが、そこで時々不思議なことが起きていた。何者かが車内で横になっているぼくのお腹の上に乗り、ドンドン飛び跳ねるのだ。『誰だ！？』と目を開けても誰もいない。おかしいなと思いながら目をつぶるとしばらくしてからまた飛び跳ねる。おかげでゆっくり昼寝が出来なかった。

ところで、その会社はいつも水に祟られていた。プロの水道屋さんが水道管を破ってしまって社内の床が水浸しになったとか、専門業者が来て、消火栓を点検しているとなぜかホースが外れて天井から水が降ってきたとか、とにかく普通では考えられない水の事故がしょっちゅう起きていたのだ。

昔からその地に住んでいる人に聞いてみるとそこは元々池があって、その会社が建つ時にすべて埋めてしまったということだ。池にしる川にしる、元々水場だった場所は不思議と水と呼ぶものなのだ。それはそこに棲みついている『何者か』が奪われた水を呼び寄せているからだ。

さて、ぼくの腹の上で暴れる『何者か』だが、実はその水と呼び寄せている『何者か』と同一のものではないのだろうか。同じ場所に『何者か』が二ついるとはどうも考えにくいのだ。では、その『何者か』とは何者なのか？

ぼくはそれを『河童』だと思っている。
もともと河童伝説のある地域だし
あながち外れではないのではないか。

犬が見た戦争

あれは夜のことだった。
ぼくがいつものように
この神社の境内で寝ていると
突然空が明るくなってね
ドンドンという大音響が始まった。
大音響とともに突風も吹いてきた。
その風に体を持って行かれそうな
強い衝撃さえ覚えたもんだ。

それから人が騒ぎ始めた。
大音響に負けじと大声を張り上げ
波となってこちらに押し寄せてきた。
この波がとんでもない波だった。
ぼくに向かって「邪魔だ」
「向こうに行け」などと言って
ぼくを叩いたり蹴ったりした。
騒ぎは夜が明けても続いた。
この神社は人であふれかえり
ぼくは身動きが取れなかった。

それまでぼくはずっと
下を向いて歩いてきたんだけど
それ以来空が気になって。
音が気になって。風が気になって
それ以上に人が気になって。
とにかく慢性的に首が痛くなったんだ。

坂を上る

キュンとなった坂を上る
ペダル漕ぐときついので
自転車押して歩いて上る
うすい雲が張った空から
紫外線情報が降りそそぎ
かるく顔が赤らんでいる
体はその条件に反応して
ジワッと汗が滲んでいる
とはいえ少し冷たい風が
朝方から吹いているので
タラタラ滴る程でもない

右手の屋根にネコがいる
前世のエサを夢見ている
向かいの屋根に鳥がいる
エデンの頃を夢見ている
鼻歌交じりの工事の親父
なぜか小指が立っている
日傘さした買い物婆さん
彼女の小指も立っている
とはいえ二人は赤の他人
いつも坂道の風景だよと
雲の上でお天道様が笑う

真夜中のカラスたち

夜中トイレに起きると
カラスたちがカーカーと
えらくやかましく鳴いている。
窓の外はまだまだ真っ暗で
明日のゴミも出てないのに
彼らは何がどうしたと言って
鳴きわめいているのだろう。

もしかしたらそこに鬼太郎が
来ているのかもしれないな。
強力な妖怪どもを鬼太郎が
やっつけたというので
虫たちのゲゲゲの代わりに
カーカーと言って鬼太郎を
讃えているのかもしれないな。

それにしてもやかましい。
このカーカーが耳について
眠れなくなればまた寝不足だ。
ほら、もう鬼太郎も帰っただろう。
あんたらもこれで充分だろう。
さあ、カーカーと鳴くのをやめて
山にでも森にでも帰っておくれ。

人の群れ

大きな空は軽く軽く晴れ渡り
ピチピチと積もった雪が
溶けて屋根から落ちてくる。
そのしずくをよけるように
多くの人々が大きな鈴を鳴らし
深々と腰を曲げて拍手を打つ。
「今年もよろしくお願いします」
樹木の所々で小さな野鳥たちが
普段は滅多にお目にかかれない
人の群れを見て驚き騒いでいる。

蝉、蝉、蝉……

それにしてもすごい音だ
その音に気づかないくらい
すごくすごく大きな音だ。
ゴミ出し日のカラスの声より
航空自衛隊の練習機の音より
真夜中に走る暴走車の音より
すごくすごく大きな音だ。
この音が暑さのBGMとなり
夏の無意識となっている。
このBGMに乗れる人が
きっと夏が好きな人であって
この無意識に馴染めない人が
きっと夏が嫌いな人なんだろう。
それにしてもすごい音だ
その音に気づかないくらい
すごくすごく大きな音だ。

巣立ち

1、2、3で飛び出すんだ。
今は技術なんか必要ない。
今必要なのは勢いだけだ。
飛びたいという気持ちを
自分の中で大きく膨らませ
とにかく羽を動かして
ここを飛び出すんだ。
振り返れば何でもないことだ。
我々はその能力を生まれつきに
持ち合わせているのだから。
さあいいか。1、2、3だ。
ここから飛び出すんだ。

猫ストレス

実家の駐車場に数匹の
野良猫が棲みついている。
野良とは言いながらも
栄養は行き届いているようで
どの猫もわりと肥えている。
昼間彼らは物陰に隠れて
人と交わることで起きる
ストレスから身を守っている。
ところが隠れ方が下手なのか
いつも子供たちから追われている。
ふー、にゃにゃおーん。

彼らの一日は夜始まる。
始まると言っても何匹かが
駐車場に集まるだけの話で
彼らは何もせず静かに座っている。
ただ好き勝手に座っているのではなく
各々が適当な距離を置いている。
他の猫と交わることで起きる
ストレスから身を守っているのだ。
そうすることで干渉を避けている。
なのにいつもケンカをしている。
ふー、にゃにゃおーん。

床屋の犬

床屋に行くといつも
小さなお座敷犬が
ぼくを出迎えてくれる。
ただ出迎え方は乱暴で
必死になって吠えまくるのだ。
しばらくすると寄ってきて
足をなめたりするのだが
それでも動きには敏感で
ぼくがちょっとでも動くと
「ウー」と言って牙をむく。

しかし落ち着きのない犬だ。
ジッとしていればいいものを
いつもウロウロして何かを
クンクン嗅いでいるし、
入ってきたお客に対しては
いちいち敵意を見せるし、
店主の姿が見えなくなると
ヒンヒンヒンヒン寂しがると
店主が姿を見せると
大げさに尻尾を振って喜ぶし。

ぼくが犬を好きになれないのは
おそらくはその落ち着きのなさ
にあるのかもしれない。
猫も落ち着きのない動物だが
人慣れしている飼い猫であれば
人を見ても知らん顔しているし、
人の動こうが動くまいが
いちいち気にすることはないし、
飼い主がいようとまいと
喜んだり寂しがったりしない。

とはいえ犬が嫌いなわけではない。
好きになれないだけなのだ。
親戚の犬は適度にかわいがっていたし
近所の犬にもそれなりに接してきた。
ただ、若い頃犬に追われたことがあって
それが軽いトラウマになっているらしく
どうしてもマイナスの感情で捉えてしまう。
逆に猫に対してはそういった
嫌な経験を持ってないので
プラスの感情で捉えられるのだろう。

朝の公園

朝の公園は野生の宝庫だ。
スズメ、カラス、ノラネコ・・
人を警戒することもなく
自己主張を繰り返す。

朝の公園は空気の宝庫だ。
タンポポ、シロツメ、ぺんぺん草・・
朝のまばゆい光を浴びて
せっせと酸素を吐いている。

朝の公園は中高年の宝庫だ。
おじさん、おばさん、変な人・・
必要以上に腕を振り
妙な歩き方を繰り返す。

帝の軍隊

墓参りに行く途中に
由緒ある神社がある。
神武天皇が東征する前に
しばらく政務を執った場所で
当時の祭祀の跡が
今でもそこには残っている。
心がついそこに向いたので
ぼくは急遽路線を変更して
その神社に車を進めた。

祭祀跡は鳥居の横にある。
十畳間くらいの広さで、
そこには小さな石を敷き詰めた
直径六尺ほどの円が二つ並んでいる。
そこに人が入らないように柵で囲い
しっかり注連縄を結んでいる。
周りは樹木が生い茂り
蝉の音が時を止めていた。

お参りをすませたあと、
遺跡の説明書きを読んでいた。
その時だった。
突然足が痒くなったのだ。
見てみると、
丈の短いズボンからはみ出した足が
何ヵ所も赤くなっているではないか。

なるほどここには
いまだに帝の軍隊がいるのか。
彼らはそこを訪れる人たちから
血税を吸って子孫を育み、
帝を守護しているわけだ。

実にロマンチックな場所ではある。
しかし実に痒い場所でもある。

道ばた仁義

道ばたにスズメがいた。

何か拾って食べていた。

周りにハトがいた。

何か拾って食べていた。

一羽のカラスがやって来た。

スズメは慌てて飛び去った。

ハトは歩いて移動した。

カラスはそこに居座って

彼らのエサを漁りだした。

そのうちハトは飛んで行った。

カラスがもう一羽やって来た。

そしてカーカー声をかけると

最初のカラスは逃げて行った。

後の奴は追いかけて行った。

それを見てハトが戻って来た。

そしてスズメも戻って来た。

遠くでカラスが鳴いている。

鳥

腹から声を出せば、
声は枯れないのだという。
歌手にしろ役者にしろ、
一流どこは皆そうやって、
声を出しているのだという。

そういえば鳥もそうだ。
彼らは一日中鳴きまくっているが、
声の枯れた鳥なんて聞いたことがない。
ということはだ、
羽毛に隠れてわからないが
鳥の腹筋というのは、羽を動かす
彼らの背筋同様にすごいかもしれない。
案外K-1の選手のように強打を浴びても
びくともしないのではないだろうか。

しかし嫌だな。鳥の腹が
腹筋で段々になってたりしたら。

猫の島

もしそこに同じ生活環境があるなら
わたしたちも一緒に転出したいです。
尻尾を振りながら犬たちは
真面目な顔をしてそう言って
ギャフンギャフンと泣いた。

もしそこに同じ自然環境がないなら
わたしたちは転出したいとは思わない。
ゴロンと寝っ転がった猫たちは
面倒くさそうな顔をしてそう言って
ニャオンニャオンと鳴いた。

かくしてこの島から人と犬がいなくなり
ストレスのなくなった猫たちは
当初は食糧に苦勞をしていたものの
自然に増え続け、今この島は
野生の猫の島と呼ばれている。

鳩との格闘

十数年ほど前に
鳩と格闘したことがある。
実家のベランダに置いてあった
ミカン箱の中に、彼らは断りもなく
巣を作って生活していたのだ。
朝になるとせわしいし、糞害もあるし
動物愛護のためにも野生の動物を
人間に懐かせてはならぬと判断し
巣を作っていたミカン箱を取っ払い
鳩を見かけたら棒を振って追い回した。
それでも鳩は
こちらの隙を見つけてはやってくる。
そこで取った手段がいらなくなった
レーザーディスクだった。
ベランダにぶら下げておくと
鳩が警戒して近寄らないのだ。
それが功を奏してか
以来鳩は来なくなった。

妖怪

山には天狗がいるから
決して一人で行かない方がいい。
バキッと木の裂ける音がするのは
天狗がさらおうとしているのだ。

川には河童がいるから
決して一人で行かない方がいい。
その流れに見とれてしまうのは
河童が引き込もうとしているのだ。

森には狐狗狸がいるから
決して一人で行かない方がいい。
いいにおいがしてくるのは
狐狗狸が化かそうとしているのだ。

街には人間がいるから
決して一人で行かない方がいい。
時折ゴホゴホと音がするのは
人間が菌をばらまいているのだ。

夢には女が出てくるから
決して一人で見ない方がいい。
一晩中いい思いをする夢は
女が生き霊となって現れているのだ。

来世の自己表現

現世ではこうやって毎日日記を書くことで
自分なりの自己表現をやっているわけだが、
その現世が終わり、来世の生命を与えられる時
仮にそれがゴキブリとしての生だったとしたら
ぼくはどうやって自己表現をするのだろう。
おそらくはゴキブリとしての自己表現を
やっていくことになるのだろうが、さて
ゴキブリの自己表現とはいったい何なのだろう。

全身を黒茶色にテカらせることだろうか。
部屋の隅を素速く歩くことだろうか。
家の中を調子に乗って飛び回ることだろうか。
嫌われてもしぶとく生き延びることだろうか。
女子供を怖がらせることだろうか。
ま、ゴキブリといえども生き物だから
その自己表現の一つには、きっと
子作りというものもあるだろう。
しかしあの卵はちょっと気味悪いな。

旅日記

そこが何屋さんなのかは忘れたが
湯布院の駅前にある小さな商店に
大きな樽が置いてあった。
何なんだろうと覗いてみると
その中に一匹のアマガエルがいた。
やけに小さな体だったが、見事な緑色で
ヤモリみたいにぷっくらふくれた指先が
やけにかわいかったのを覚えている。
さて、彼がなぜその樽の中にいたのかは
知らないが、その動きを見ていると
懸命にそこから抜け出そうとしている
—そんなふうに見える。だんだん
手助けしてやりたい気持ちになってきて
手を伸ばそうとした時だった。ふと
店主が飼っているのかもしれん。
という思いがよぎった。いや
案外そこが住みかなのかもしれん。
という思いにもなった。そのうち
手助けすると罰が当たるのかもしれん
という気持ちになってきた。ところで
アマガエルの罰って何だろう
—などと馬鹿なことを思っているうちに
汽車の時間がきてしまった。
ぼくはアマガエルに別れを告げて
駅舎の中に入っていった。

独演会

かれこれ一時間にもなるだろうか
家の前の公園で、一羽の野鳥が
声を張り上げて鳴いている。
まだ鳴き慣れていないのか
そのつど抑揚は変わるし
出だしの音階は微妙に違っている。
何小節かを一気に歌い上げては
プレスして、プレスして、プレスして
また何小節かを歌い上げる。
その何小節も短かったり長かったりで
常に一定なわけではない。
もしかしたら鳥の世界では、彼は
音痴な部類に入るのかもしれないが
とにかく力を振り絞って
さらには思いの丈を込めて
歌っているように聞こえる。
自分の縄張りを主張しているのか
それとも異性を誘っているのか
はたまた深遠な哲学を語っているのか—
きっと何かを訴えているのだろう。
だが、いまだ人間であるぼくには
それを理解してやることが出来ない。

ラッキー

近くの池にカメがいる。
時々顔を覗かせて、
時々甲羅を干している。
カメを見た日はラッキーで、
いつもいいことが待っている。
だから池のそばを歩く日は、
必死にカメを探していた。

同じ池にコイがいる。
七、八十センチはあるコイだ。
巨体を揺らして泳いでいる。
カメほど多くは見ないけど、
それゆえ見た日はラッキーだ。
だから池のそばを歩く日は、
必死にコイを探していた。

カメとコイを探すうち、
ひとつのことに気がついた。
見えない時もあるけれど、
池にはいつもラッキーな
カメとコイが泳いでいる。
つまりは彼らを住まわせている、
その池自体がラッキーなんだと。

以来池を見るだけで、
いつもぼくはラッキーだ。
もちろん今でもその池には、
カメもいるしコイもいる。
前より多く見れるのは、
ぼくがラッキーになったから。
そう思うだけでラッキーだ。

輪廻（1）－水の人生－

ここはこの世なのだろうか。
さっきから屈折した光が
頭の上から差し込んでいる。
いったいここはどこなんだろう。
何かの流れに乗っている。
それに逆らうと動きづらくなる。
息はしてないが生きている。
周りは少し濁っているのか
日が差しているのに暗く感じる。
そうだ、ここは水の中なのだ。

以前は空気の町で生活していた
そんな気がする。ずっとずっと
遠くにその記憶があるのだ。
ただそれが長い夢だったのか
それとも実体験だったのかは
わからない。わからない。
それを検証する能力が
今は失われているのだ。
とにかく今の人生はこの
少し濁った水の中にある。

輪廻（2） - ぼっとな人生 -

目が覚めてからぼくは
大きく息を吸い込んで
あたりを見回した。
無数の白い仲間たちが
目の痛い沼地にうごめいている。
『ここはどこなんだろう。前にも
見たことのある風景なんだが』

徐々にこの世に慣れてくると
何となくにおいというものを
ぼくは感じるようになった。
ずっと前に嗅いだことのある
実に郷愁の漂うにおいだ。
『ここはどこなんだろう。前にも
住んでいたことがある場所なんだが』

それからしばらく経ってのこと。
何となく背中がムズムズしてきた。
その背中をねじった時だった。
ぼくは宙に浮いてしまったのだ。
羽音を立てながらぼくは思った。
『そうだ、この風景だ。これこそ
ぼくが何度も夢見た風景だ』

ぼくがこの沼地から出ていったのは
ある雨の日の朝のことだった。
以来二本足の大きな生物との
闘いの毎日を繰り返している。
最近ようやく自分が何者であるかを
理解した。しかし、何でまたぼくは
ハエとして生まれてきたのだろう。

もう一つの家族

ぼくら家族が住むこの家には
もう一つの家族が住んでいる。
彼らは老若や男女の区別なく
酷く好戦的で無慈悲で野蛮で
ぼくらの姿を見つけるや否や
きゃーきゃーと奇声を上げて
はきもの片手に襲ってきたり
猛毒の霧をふりかけてきたり
時に凍死させようと試みたり
こちらの息の根を止めるまで
その手をゆるめず攻めてくる。

例えその場で取り逃がしても
通り道に罠を仕掛けてみたり
毒煙を撒いて住めなくしたり
手を替え品を替え攻めてくる。
世間に迷惑がかからぬように
人目を避けながら生きている
大人しいぼくらを滅ぼそうと
しつこくしつこく攻めてくる。
ぼくら家族が住むこの家には
酷く好戦的で無慈悲で野蛮な
もう一つの家族が住んでいる。

奥付

もう一つの家族

著者：皆岡樹史（みなおか たつし）

著者プロフィール：

- ・昭和 32 年 福岡県八幡市生まれ
- ・モットー：『人生万事大丈夫！』
- ・趣味：作詞、作曲、弾き語り。
- ・影響を受けた人：一遍，盤珪，高村光太郎，中原中也，ボブ・ディラン，吉田拓郎
- ・影響を受けた書物：「老子」「臨濟録」「日本靈異記」「徒然草」「延命十句観音経靈驗記」
- ・影響を受けたマンガ：「あしたのジョー」「人間交差点」「シュマリ」
- ・ブログ：[\[https://detan.club/\]](https://detan.club/)

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブクログ

もう一つの家族

著 皆岡 樹史

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
